

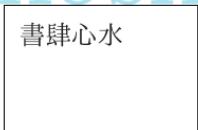
書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



ムスリム女性に救援は必要か

SAMPLE  
ライラ・アブニルゴド著  
鳥山純子・嶺崎寛子訳  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水



書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

# SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

DO MUSLIM WOMEN NEED SAVING?

by Lila Abu-Lughod

Copyright © 2013 by the President and Fellows of Harvard College

Japanese translation published by arrangement with  
Harvard University Press through The English Agency (Japan) Ltd.

目次

はじめ——権利と人生	11
人類学者的思考	14
オルタナティブ・ボイス	
フェミニズムはどこに	
選択が生み出す混乱	22
傷ついた小鳥	28
日常という政治	31
日常という政治	37
ムスリム女性に（いまだに）救援は必要か	40
文化起因論と女性の動員	
ヴェールのポリティクス	44
救済というレトリックを超えて	49
女性のために戦争に赴くということ	62
理解をこえているという感じ	71
「イスラーム・ランド」	78
85	85
新たな常識	70
78	78
71	71
62	62
49	49
44	44
40	40

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

3	ムスリム女性とは何か 道義的十字軍に備える	96 90
4	道義的十字軍の認可／権威づけ ユートピア的至高の価値観	99
5	「読み捨て三文ノンフィクション」のめくるめく世界 「読み捨て三文ノンフィクション」のめくるめく世界	100
「名譽犯罪」の誘惑	135	
モラル・パズル	138	
リベラル・ファンタジーの強制	142	
軽んじられるガバナント	152	
変化の風	159	
誠実な活動家のジレンマ	164	
エジプト——変化し続けるフィールド	167	
「ムスリム女性の権利」の社会生活	172	
欲望の構造化	127	
奴隸ポルノ	121	
人身売買文学／文学による人身売買	115	
105		

## 権利という領域のただなかに、人類学者として

政府管理下における権利  
融通無碍なイスラームの諸機関と宗教言説  
権利の商業化 179 177

パレスチナ——逃れられない政治  
日常生活におけるハイブリッドな経路 182 187

女性の権利とイスラームの改革  
〔権利の世界とは〕かけ離れた生活 212 202

家庭領域における暴力 217

恣意的な介入 225

## 結論

### 人道主義の記録

228

考慮すべき条件 230

235

合意形成と自由選択権 235

235

恋愛至上主義——「気つきにいく」もう一つの束縛 249

243

ワンクリックの正義ではなく 350

原注 257

謝辞 301

NGO等団体名一覧 350

307

訳者あとがき

310

**SAMPLE**  
**Shoshi-Shinsui.com**

凡例

一、原文における強調のイタリック体部分は訳文では傍点を付して示した。書名のイタリック体部分は『』で示した。

一、訳者による文意の補足は〔〕で括って示した。

一、訳注は（）括りの二三行割で記し、冒頭に＊印を付けた。但し、原注に挿入した

訳注は、訳者による文意の補足同様に〔〕で括って示した。

一、訳語に対する原語を示す場合は少しサイズを下げた（）括りで示した。

一、著者による引用文への挿入は〔〕で示されている（原書のままの表記）。

一、日本語訳がある文献の訳は、原則として訳を引用したが、必要に応じて訳出した箇所もある。

一、卷末附録のNGO等団体名一覧は訳者が作成した。

一、索引は書肆心水が作成した。

SAMPLE  
Shoshi-Senshu.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



SAMPLE  
ムスリム女性に救援は必要か  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

私の奮闘を見守ってくれた母に

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## はじめに——権利と人生

二〇一〇年一二月のある晴れた日、私はエジプト南部の村に住む女性、ザイナブとお茶をしていた。<sup>①</sup> 彼女とは何十年も昔からの知己だった。互いの近況を伝えあつてゐるとき、ザイナブは気を使つて、私の新しい研究テーマについて尋ねた。欧米の人々はどうして「ムスリム女性は抑圧されている」と信じているかについての本を書いてゐる、と私は説明した。するとザイナブは反論した。「でも実際、女性たちは抑圧されているじゃない！ 色んな意味で権利がないし、職場でも、学校でも、それに……」

その激しい口調に驚いて私は「でもそれは、イスラームが原因？」と訊いた。「欧米の人々は、イスラームこそが女性を抑圧していると信じてゐるのだけど」。

今度はザイナブが驚く番だった。「え？ そんなわけないじゃない！ それは政府のせいよ」。彼女は説明した。「政府が女性を抑圧しているの。政府が国民を見捨ててゐるの。国民に仕事がないのも、何もかもが高くて誰も何も満足に買えないのも、政府にとつてはどうでもいいこと。貧乏はつらい。男たちだって同じように、貧乏には苦労してる」。

その会話を交わしたのは、エジプト人が路上を埋め尽くし、権利と尊厳と、三〇年続いた政権の打倒を

求めて声をあげ、世界の耳目を集めたあの日（（されるアラブ民主化運動が始まったとされる二〇一二年一月二五日か））より、ほんの三週間前のことだつた。その日、ザイナブには怒るに十分な理由があつた。その日の朝着いてすぐ、私は彼女の一家が苦悩の渦中にいることを見てとつた。

ザイナブの自宅の古いリビングルームを改装して開いたカフェのシャッターは降りたままだつた。なかでは氣落ちした息子が、無氣力にソファーに寝そべつてゐた。彼はこのカフェを切り盛りする彼女の末息子で、実務に長けた働き者だ。初めて会つた頃、彼は頭のいい熱意に満ちた子どもで、私の夫がザイナブを手伝つて洗濯機を直すのを食い入るように見つめていた。彼が見せてくれる自作の電動おもちゃに、私たちはいつも心を躍らせた。彼はいつも率先してロバのカートを引き、ザイナブが乳を絞つて収入を得ていた羊や水牛の飼料を集めに出かけていつた。

ザイナブは警察署から帰つて來たばかりで、興奮していた。カフェで息子を手伝つてくれていた男の子が連行された理由を、警察署に聞きに行つたのだ。彼女の説明はこうだ。カフェに地元の公安警官（the local security officer）が来て朝食を出せと要求をした。（しかし）他のお客に先に朝食が出された。どうやら公安警官や憲兵隊（the military police）は日常的に自ら来るなり手下を使いによこすなりして、食料をせしめているらしい。息子が彼らにと準備していたとびっきりの食事——本物の澄ましバターのたっぷりかかったフル（（＊ソラマメの煮込み、朝食の定番））、卵、チーズ、ピクルス、そして山盛りのパン——のことを、ザイナブは身振り手振りを交えて鮮やかに説明してみせた。彼らは定価を払おうとしたことなど一度もなく、時々は代金を踏み倒した。そして今回は、彼らはウエイターの少年を逮捕したというわけだ。

ザイナブは頭痛をやわらげるため濃い紅茶を飲んだ。私はふざけた提案で彼女や家族を元気つけようとした。「メニューと値段がすぐにわかるように板にメニューと値段を書いて置いておいたら？ あいつら

が自分たちがしていることを恥ずかしく思うように、定価の隣に『警官用特別割引価格』って欄を作ればいいじゃない』。ザイナブも末息子も笑わなかつた。ザイナブたちは、この嫌がらせに疲れ果てていた。

「問題は」とザイナブは説明する。「誰も彼らに立ち向かう勇気がないってこと」。たつた一言で、この男たちは彼女のカフェを潰すこともできる。すでにザイナブは、日々公安警察と観光警察に袖の下を支払っていた。制服の男性や私服警官らが来ては煙草の包みをいくつかせびり、支払いを拒否する度にザイナブがいきり立つのを、私はずっと見てきた。彼らはザイナブを無知な農民とみくびつていた。彼女の顔は長年の野良仕事で日に焼け、黒い外套(性のシンドル農民女)が彼女を無学に見せていた。彼らはザイナブが無力だと知つていた。なるほど彼女が「政府は女性を抑圧している」と政府を責めるのも当然だ。

私はかれこれ二〇年前から、ザイナブとその家族と親しくつきあつてきた。彼女の末っ子は私の双子の子どもたちと同い年で、私たちは子どもたちが赤ん坊の頃に知り合つた。彼女が子育ても家計の切り盛りもほぼ一人でしている姿に私はつくづく感心させられた。彼女の夫は、この不景気な地域で多くの人がそうしたよう仕事を探しにカイロに行き、短い休暇の時だけ戻つてくる。挽歌から農業の経済までのあらゆる知識を持つ知的な彼女は、家族の暮らしを良くするため、倦まずたゆまず頑張つてきた。子どもたちが育つて働き手となつてからは、保存状態の良いファラオ神殿目当ての観光客が訪れる村のバス停のそばという地の利を、十全に生かせるようになつた。彼女は小さなキヨスクを出し、タバコやバッテリーやチューインガムを売り、その後手を広げてミネラルウォーターや炭酸飲料、お菓子なども扱うようになり、ショッピング品物を出し入れし、客の相手をし、品物を手配し、許可証を申請し、袖の下や罰金を払い、頭痛が日常化して、収入も安定しなかつた。

もちろんザイナブの個人的な状況は唯一無二のものではある。彼女はエジプトの貧しい地域に住む。結

婚生活も理想からはほど遠い。活動的で独立不羈で、ビジネスのセンスもあり、複雑な農場経営も、何年もほぼ一人でこなしてきた。一度も学校に行けなかつたことが後悔の種だが——彼女が育つた時代には、学校に行かない女の子が多かつた——しかし鋭い彼女は、学校に行つた彼女の子どもたちよりも、自分のほうが世界のことを理解しているように思えるのはどうしてなのか、と不思議がつた。

そんな彼女が私の「ムスリム女性」本に示した反応は、私がアラブ世界各地で見た何かを裏付けるものだつた。彼女は困難のただなかで、家族のためにどうやつたらベストを尽くせるかをいつも考えていた。彼女は自分の生活や立ち位置を規定する政治情勢——それが治安国家からくるものであれ、国際的な観光経済の一部であることからくるものであれ——に対しても鋭い認識を持つていた。欧米人は誰もが、彼女は宗教によつて抑圧されていると信じるだろう、という私の指摘に彼女はショックを受けた。大学教授から村のビジネスウーマンまで、アラブ世界で私が知りえた多くの女性たちと同じように、ムスリムとしてのアイデンティティは彼女にとつて重要であり、神への信仰は自分や共同体に関する感覚と切つても切れない、不可欠なものとしてあつた。

### 人類学者的思考

私は民族誌的研究を長く続けるうちにザイナズのような女性たちと知己になつた。そして「ムスリム女性」について読んだり聞いたりすると、たびたび戸惑うようになつた。エジプトの農村部で女性たちに出会つて培つた自分の経験と、アメリカのメディアにおけるムスリム女性の表象や、夕食会の席上で、医者のオフィスで、子どもたちのサッカーの試合の横で、私が中東について書いていると知つた後に人々が気

軽に話しかけてくる内容とを、整合性を持つて理解するのは本当に難しい。人々があんなにもたやすく、ムスリム女性に権利などないと決めつけることには驚かされる。

本書は、自分の経験と前述のような人々の反応とのギャップを理解しようとした、私の学問的な「旅」の記録である。二〇〇一年、アフガニスタンへの米軍による軍事侵攻を正当化するために、「ムスリム女性の権利の擁護」が呼ばれた時点で、私にはすでに二〇年近く、エジプトの様々なコミュニティでの女性の生き方について書いてきたキャリアがあった。七〇年代末に、私はエジプトの西方砂漠のとあるベドウイン・コミュニティに二年住みこんだ。当時の私は人類学を専攻する大学院生で、論文を書くためにフィールドワークをし、この経験をもとに『秘められた感情』(Veiled Sentiments) を出版した。その本には、驚くべき発見を書いた。コミュニティの女性たちにとって詩がかけがえのないものであることや、彼女たちがその詩を通じて、男性や人間関係、人生などについて、感情を表現していたことを書いたのである。哀切な調子の詩の朗誦によって自分自身を表現する女性たちは、アラブ・ムスリム・コミュニティにおいて、文化的・道徳的生活がどう複雑に絡み合っているかを、最初に私に教えてくれた。

しかしこの最初の本は学術的かつ専門的な議論を扱うもので、私が知りえた女性たちの、社会における関係や態度の細かなニュアンスを含めた、生き生きとした様子を伝えきれなかつたのではないかと心配になつた。そこで八〇年代半ばに同じコミュニティを再訪し、そこに六か月間滞在した。この時の調査をもとに、女性たちの語りだけで構成した二冊目の本を出版した。この二冊目の本『女性の世界を書く』(Writing Women's Worlds) で私は、一人ひとりの女性たちの日々の物語を通じて、彼女たちの世界を貫く精神 (spirit)

タイプを覆したかった。子どもが欲しいと切に願う女性もいれば、子どもが多すぎて疲労困憊の女性もいた。結婚したい女性もいれば、結婚を避ける女性や避けるふりをする女性もいた。夫と素晴らしい関係を築いている女性もいれば、夫に心を傷つけられている女性もいた。悲惨な結婚から逃げおおせた女性もいたし、子どもへの愛情から、悲惨な結婚に縛り付けられている女性もいた。悲惨な結婚から逃げおおせた女性もいなしの相互依存についての物語、そして年と経験を重ねることによる変化の物語だった。私が描いた女性たちの中には、大家族に暖かく見守られ、自信にあふれ、パワフルな人もいれば、孤独で貧しい生活を送る女性もいた。大胆で自尊心の強い女性もいれば、運命に翻弄される女性もいた。若い女性でありながら、自分がコミュニティの欠陥とみなせば、それを拒絶する者もいた。彼女たちは、核となる価値を堅守し、そうした行動をより良いムスリムになるためのものだと主張することもあった。誰もが自分の権利について、鋭い感覚を持つていた。

こうした女性たち一人ひとりの経験の個別性と、人生や人間関係についての彼女たちの考えは、社会科学的手法に基づく一般化と、それを通じた文化の典型的描写であると私が感じる人類学的傾向に対しても、再考を迫る。私は二冊目の本の読者には、人類学者だけでなくフェミニストを想定した。語りを前面に出すことと、「家父長制」について語ることや、権力の働きを指摘することの難しさを感じてほしかった。長年にわたる調査によって、私は中東の女性をよく知らないのに偏見まみれの世論に、これまで言われてきたのとは何か違うものを示したかった。エジプトの小さなコミュニティで長年暮らし、子どもたちが育ち、女性が家族を作りあげる努力をし、人々が夢の実現方法を見出し、人間関係や役割が変化し、そして時に希望があきらめに変わる様をつぶさに見てきた自分の経験をもとに、私は「生きられるままの人生」の手触りを伝えるべく、できる限りの努力をした。<sup>(5)</sup>

私は自分の取り組みを「文化に抗して書く」と名付けた。私は、文化の一般化は、人々のかけがえのない経験や、私たち誰もがそのただなかにある偶発性に気づく妨げになるばかりでなく、それと向き合うことを難しくすると考えている。文化「<sup>(5)</sup>という概念」は、これまで以上に国際政治や常識の中核をなす構成要素となりつつある。専門家たちは、我々の世界では、文明や文化の衝突が起きていると言う。彼らは、西欧と「その他」の地域には埋めようのない溝があると言う。とりわけムスリムは特殊で、西欧の文化を脅威に晒す——「その他」の地域のなかでも最も文化的同質性が高く、最も問題含みの——存在として描かれる。ムスリム女性はこの「新たな常識」のなかでは、ムスリムの文化がいかに異質かを示すための、單なる象徴にすぎない。

西欧におけるムスリム女性の表象には長い歴史がある<sup>(6)</sup>。しかし二〇〇一年九月一一日の同時多発テロ以降、「虐げられるムスリム女性」というイメージは、現地の女性たちを彼女たちの文化から救うという使命と結びつけられるようになつた。本書で明らかにされるように、こうした見解は、中東や南アジアにおけるアメリカとヨーロッパの国際的な暴挙にもつともらしい説明を与え、それを合理化する。メディアは女性の地位や女性の抑圧の物語に喜んで多くの紙面を割いた。フェミニストもこの活動に参加した。ムスリム女性が書いた大衆的な自伝は、イラン、アフガニスタン、サウジアラビアに暮らす無学な同胞女性たちの苦境を白日の下にさらけ出し、西欧でベストセラーとなつた。女性団体は、人権や法律の専門家集団とともにアフガニスタンに赴いた。後こうしたグループはイラクに事務所を構えるが、皮肉なことに、イラクはもともとアラブ世界において最高レベルの教育がなされ、女性の労働市場参加率が高く、政治参加も進んだ国だった<sup>(8)</sup>。

ムスリム女性に対する共通の懸念「といちイッシュ」においては、改革派と右派の差は曖昧である。保守

SA  
MPLE  
Shoshi-chanshi.com

派のなかには、「ムスリム社会が女性に課す従属状態」などの「際立った不正義」に対し、効果的な反対運動ができていないとして、アメリカのフェミニストを非難する者もいる。<sup>(9)</sup>彼らは、フェミニスト研究者たちが、「女性らしさ」を警戒し、反家族的で、伝統的宗教に敵対しているのは言うまでもないが、さらには、反アメリカ主義の害毒に蝕まれ、偏在する家父長制に執着しすぎて、「我々には想像もつかない蛮行」を見過ごしにしている、と非難する。一方で、米国のフェミニスト運動の評論家は、九〇年代のアメリカ・フェミニズムの復興には、国内問題からグローバルな課題への問題関心のシフトが見られるという。例えばファーレルやマクダーモットは、七〇年代以降のアメリカ・フェミニズムの停滞を、アフアーマティックアクション、教育、就労、性的権利などの勝ち取った成果が、保守的なバックラッシュによる異議申し立てに晒された結果と見る（それと同時にアメリカのフェミニズムが人種差別的であるという少数派の批判も、フェミニズムを衰退させた）。グローバル・フェミニズム、インターナショナル・フェミニズムへのシフトを、評論家は「個別の家庭内政治からの戦略的転換」であるという。アメリカのフェミニストは、周囲への働きかけが容易な、女性器切除、ヴェール着用の強制、名誉殺人などの、壮大な抑圧行為に注目するようになつた。身近ではない問題をとりあげることで、彼女たちは「人権の擁護者としての米国という、大きな政治的議論の末端」に安定した場所を確保することができたのである。<sup>(10)</sup>

こうした変化を前に、構成メンバー全員がムスリムであるコミュニティで、長い間女性たちとともに暮らした経験を持つ人類学者として、私は自分の民族誌的研究を通じて得た知見をもとに、現状において何ができるか、何をすべきか、とことん自問させられた。民族誌的研究のいろはの「い」は、長い間日常生活をともにし、直接物事を見聞きすることである。私は二〇年もの間、今や女性の権利を守らねばならない場所として均質化されてしまった「ムスリム世界」における女性の生き方について、なにがしかを学ぼうと

試みてきた。そして私は、なぜムスリム女性の窮状という西欧の新たな常識が、私自身の経験や歴史を学ぶことによって得た知見とこんなにも食い違うのか、その理由を詳細に検証するプロジェクトを始めることにした。本書は、ムスリム女性と彼女たちの権利に関する問い合わせどのように考えるべきか、を明らかにするための試みである。

私が行うのは、メディア表象の分析や批判にとどまらない。大衆的なレトリックがどのように政治利用されているのかの検証だけでもない。私が行うのは、長年の知り合いである女性一人ひとりの生き方と真剣に向き合うことである<sup>(1)</sup>。この本のなかで私がその人生を紹介するどの女性も、教条的見解に疑問を抱くよう私たちを促してくれる。本書で紹介する一人ひとりの女性たちは、彼女たちが非常にジェンダー化された生活を送っていることを教えてくれるその時にも、ムスリム女性が行使する権利（もしくは行使できない権利）についての、今日の理解のあり方の問題点を私たちに教えてくれる。彼女らのなかには、移動が制限されている女性もいる。振る舞いや道徳性に強い理想を抱き、男性と女性の権利と義務を区別する法や規範に従つて生き、そのなかで望ましい選択を行うために苦労している女性も多い。彼女たちの事例を用いて私は、彼女たちがまさにそのとき、その場所で直面する具体的なジレンマと困難と、西欧に広く流通する、自分たちの文化に抑圧された恵まれないムスリム女性という物語との、断絶に橋を架けたい。

### オルタナティブ・ボイス

西欧世界で流布するムスリム女性のイメージへの違和感を訴えているのは私だけではない。そしてこうしたイメージと、今日勢いを増している暴力の政治との安易な結びつきとに、何らかの関連があるので

と疑問を抱いているのも私だけではない。アメリカの公的空間では、非公式な形での仲裁や、慎重な批判がされている。二〇一一年四月一三日、ムスリマ・メディア・ウォッチという、ムスリム女性の表象を監視するウェブサイトが、ショッキングなドイツの人権キヤンペーンのポスターをウェブで公開した。<sup>(12)</sup>（\*参考文献のDusenberry, MayaおよびFakhraie。）最初に目に飛び込んでくるのは、ビニールのごみ袋が泥壁にそつていくつか並んでいる姿である。黒のごみ袋もあれば、青のごみ袋もある。よく見るとごみ袋に混じって、一つ青いブルカ（アフガニスタンの全身を覆うタイプのヴェール）がある。そこには、ドイツの人権キヤンペーンのスローガンが読める——「抑圧された女性はたやすく見落とされます。彼女たちの権利のための戦いに支援をお願いします」。他のフェミニストのウェブサイトもこのポスターを取り上げ「行為主体（Agency）はたやすく見落とされます。特にそれが意図的にかき消された場合は」と反論した。<sup>(13)</sup> ムスリムであれ非ムスリムであれ、そのポスターに注目したフェミニストはこう問い合わせる。なぜ人権キヤンペーンを担う人々を含めこれだけ大勢の人が、ムスリム女性の特定の服装なんぞを、彼女たちを行為主体性を持つ個人とみなさず、自分の意見表明ができない女性と決め付ける根拠とするのか。こうしたフェミニストたちは、女性たちが晒されている虐待を無視しているわけではない。そうではなくて、ムスリム女性たちを物言わぬごみ袋のように扱う代わりに、そうした女性たちと言葉を交わし、彼女たちが向き合っている問題を知る必要があると訴えているのである。

フェミニスト学者のマーサ・ヌスバウムもまた、ヴェールを纏うことや体を覆うことを抑圧の象徴とするのは問題であるとの見解を公にしている。二〇一〇年の『ニューヨーク・タイムズ』紙のブログ記事で彼女は、ヨーロッパ諸国のブルカ禁止法に、アメリカの法律と歴史的価値観の中核をなす概念である良心の自由という原則と、尊厳の平等という人権の概念にもとづいた議論によつて反論した。<sup>(14)</sup> 女性の衣服の

一部を禁止することを支持するお決まりの議論を彼女が高い見識に基づいて論破していくさまは、説得力があるだけではなく、小気味よかつた。

まず彼女は、ブルカは男性支配と女性に課される強制の象徴だという議論を取り上げ、そうした服装批判を繰り広げる人々は、イスラームのシンボルについて何も知らないのみならず、自分たちの社会の、男性支配を示すよくある慣行を根絶しようとするしない、と切り捨てた。営利目的での女性の搾取、美容整形、男子学生社交クラブにまつわる暴力 (fraternity violence) などは、自文化の男性支配のよく知られた事例である。ヌスバウムはブルカ禁止賛成派による二つの議論、すなわち、(1)「安全管理上、公的空間においては顔を出す必要がある」と、(2)「顔の一部を隠すことによって、市民の関係に適切な透明性と互恵性が損なわれる」という議論には矛盾があることを、日常的な例を使って説明した。「シカゴは、ヨーロッパの多くの地域同様寒さの厳しい土地です。通りを歩く時には帽子を耳や眉が隠れるまで深く被り、鼻や口の周りにしっかりとスカラフを巻きます。透明性も安全性もそれで問題はありません。公共の建物に入ることを禁止されたりすることもありません。さらにも言えど、人気があり信頼を集め専門家にも、一年中顔を隠している人たちが大勢います。外科医、歯科医、アメリカンフットボール選手、スキー選手やアイスホッケー選手たちです」。

その後掲載された記事でヌスバウムは、ブルカは女性を非人間（ごみ袋のように）として表象するため他のものとは別ものだという読者にこう答えた。彼女は「私たちの詩では多くの場合、目は魂の窓とされています」と書き起こす。シカゴ大学の彼女のオフィスの建築工事の間、粉塵が歌声に悪影響を及ぼすことを恐れた彼女は、目以外「の顔」を全て覆わなくてはならなかつた。学生はすぐにそれに慣れだ。彼女は「私の個性が殺されもしなければ、彼らが私の個性に触れあうことができない、と感じることもなかつた」

と言う<sup>(15)</sup>。そして彼女は、もしも人間に平等な尊厳を認めるのであれば、ブルカ禁止を訴える議論が差別的であることを自覚しなければならない、と締めくくった。後の彼女の著作『新たな宗教不寛容——恐怖と不安の政治の時代に (The New Religious Intolerance: Overcoming the politics of Fear and Anxious Age)』ではさらに、「覆い隠すこと」を禁止する提案を加速せしめたのは、「顔を隠す」とよって生じる問題ではなくて、イスラーム教徒に対する恐怖であった、と述べている。<sup>(16)</sup>

しかしムスリム女性に対するステレオタイプに反対する人々は、女性たちの苦しみを見逃してはいない。ヌスバウム自身、世界中で起きているジェンダーに基づく総体的な不平等や女性への不快な暴力を糾弾している<sup>(17)</sup>。私も、飢餓や貧困、家庭内暴力、性的搾取、そして女性の健康や尊厳を損なう行為などで、今のように女性が苦しまずに済む世界であつてほしい。女性にとってより良い世界を望むなら、理想主義的であろうとも、道徳的、政治的理想を目指さなければならない。しかし、女性に対するひどい抑圧の典型例や格好の事例とされてきた女性たちと暮らしてきた研究者として私は、女性の苦しみの本質および原因を分析する際には慎重でなければならないと主張したい。そのためには、ザイナブのような女性の知見を真剣に取り上げることから始めたい。

## フェミニズムはどこに

過去二〇年は、女性の権利という新しい国際的な「道具」の発展と、フェミニストの女性「問題」に関する関心事が世界的な連結を生み出したという二点において重要な時期であった。一九九〇年代には、一九五五年に行われた第四回北京世界女性会議や、「女性の権利とはすなわち人権である」と訴えるキャンペ

ーンの成功によって、女性同士の世界的交流、女性のエンパワーメントに尽力するNGO活動家の運動、第三世界におけるフェミニスト・エリートの出現、西欧フェミニストの他地域における活動などに彩られた、新たな時代が幕を開けた。国連女性差別撤廃条約（CEDAW）は重要な理論枠組みと、ジェンダー平等推進のための関連機関とを作り上げた。<sup>(18)</sup>学界でもそれ以外の場でも、活発な議論がなされるようになつた。自文化外での家父長制を非難し、普遍的なジェンダー公正を唱えるリベラル・フェミニストは、人種的差異、社会階級、地理的位置によつて女性たちの経験はそれぞれ異なるという、第三世界のフェミニストや西欧の有色女性の主張を突きつけられた。<sup>(19)</sup>女性を画一的な一つのカテゴリーとみなすことなど、一体できるのだろうか。

フェミニストの間では、女性という一つのカテゴリーに括れるほどに女性は共通項を持つのか、という問い合わせる激しい論争が行われてきた。この論争は、本書の対象とも密接に関わつてゐる。私たちは、「ムスリム女性」という同じように均一化されたサブカテゴリーを考察の対象とすべきではないか。私が「ムスリム女性」を対象とするのは、ムスリム・コミュニティの内外で、女性の権利がこのカテゴリーのなかで枠づけられているためである。私が本書で分析する個々の女性はみなアラブ世界の人々で、そのほとんどが、私の調査地であるエジプトの農村コミュニティに住んでいる。こうした、「一般」と「個別」とのつながりには、説明が要る。

ムスリム女性は全ての大陸に住む。南アジアや東南アジアには、中東をはるかにしのぐ数のムスリムが暮らしているし、法や文化に関わる重要な発展は、南アジアや東南アジアで生じた。研究者たちは、ムスリム女性たちが暮らす全ての国について、各々が抱えるジェンダー問題を書いてきた。こうした様々な文脈を生きる女性の経験は、私のエジプトにだけ特化した仕事とは違つた事柄について教えてくれるだろう。

ムスリムが暮らす国にはそれぞれ異なる歴史がある。ムスリムが少数派の国もあれば、多数派の国もある。ほとんどのムスリムが豊かな暮らしを送る国もあれば、ほとんどのムスリムが貧しく暮らす国もある。人類学者や社会学者による詳細な民族誌や、生き生きとしたドキュメンタリー映画や、アーカイブを扱った歴史学者による研究や、そうしたコミュニティ出身の女性によつて書かれた小説、詩、隨筆、さらには専門家による法や法改革の記録は、そこには非常に大きなばらつきがあることを教えてくれる。

もし私がインドの専門家であれば、何百年も歴史を遡つたり、地域区分をするなどして、バラエティに富んだ経験や状況を描いたに違いない。実際、インド亜大陸におけるムスリム女性の権利や生活を形作るダイナミクスは、めまいがするほど複雑だ。グジャラートでの悲劇的なコミュニティ暴動のときの彼女たちの立場の弱さ（＊二〇〇二年二月二七日の列車炎上事故をきっかけに、犠牲者は二〇〇人以上、その多くがムスリムです。ヒンズー教徒によるムスリムの襲撃が頻発し、犠牲者は二〇〇人以上、その多くがムスリムであった）から、遡れば印パ分離独立前に駒として利用された歴史まで、（ヒンドゥー教徒やシーアク教徒の女性たちと同様に）ムスリム女性たちは戦利品として扱われた。一転して分離独立後には、ムスリム女性たちは国家の名譽として扱われた。いずれの経験においても核になつたのは、ムスリムというアイデンティティであつた。インドでは、現行の家族法に代わる、宗教を問わない統一民法（Uniform Civil Code）の制定の是非をめぐり、長年にわたり論争が続いている（＊現行のインドの家族法はそれぞれの宗教の宗教法や慣習を法源とする。よつて宗教ごとに適用される法律が異なる）。ムスリム身分法における離婚の事例がインド人フェミニストによつて問題にされたことで、ムスリムのコミュニティは、ムスリム身分法の堅持を求める方向で固まりつつある。<sup>(20)</sup>

ムスリム女性に対する、よりセンセーショナルで世界中の注目を集めん虐待は、私が暮らし仕事をする場所とは別のところからやってくる。アフガニスタンには、二〇〇一年から米国の軍隊が駐留している。そのため米国の新聞では、定期的にアフガニスタンの女性が抱える問題が取り上げられる。そこで語られ

るのは、戦争による負傷や、その他軍事化の影響や、戦争による強制移動の顛末ではなく、「文化的実践」である場合が多い。これについては一章で取り上げる。こうした見出しの裏を読むことが重要である。

バングラデシュは、女性への酸攻撃（＊塩酸などの強酸を女性の顔などにかける暴力。身体に深刻な後遺症を残す）の報道によって一躍脚光を浴びた。アメリカのドキュメンタリー番組、「希望の顔」はその代表例である。この問題とその報道のあり方について研究したエローラ・チョードリー（＊女性学、エトランヌンシヨン研究者）によれば、酸攻撃には、現地の献身的なフェミニストが長年抗議活動を行っていたという。フェミニストたちは援助団体を設立し、被害者に対するサービスを提供すべく、下準備を進めていた。バングラデシュの活動家と被害者（同じ人物の場合もある）は、自分たちの活動に国際的な支援を取り付けることに成功した。しかしチョードリーが指摘するように、こうして設立された援助団体が費やしてきた努力は、国際人権団体であるアムネスティ・インターナショナル（Amnesty International）が、アメリカのドキュメンタリー番組に賞を与えたことで忘れ去られてしまつた。<sup>21</sup>さらに気がかりなことに、チョードリーはこうした事件や問題にかかる人口の変化が、「ムスリム女性の進歩」（あくまで括弧つき）の語りに沿うように単純化されたことを明らかにした。それは、虐待されたムスリムの女性たちは、「野蛮人」の手から啓蒙された「救済者」によって救い出され、新しい人生を得たという物語だ。<sup>22</sup>硫酸をかけた人たちは誰だったのか、なぜ被害者は攻撃されたのか（セックスを拒否したこと、家族間の問題、土地問題など）といった事実の煩雜さは問題にはならなかつた。さらには深刻なのは、善意の支援者たちが問題を肩代わりしたことが被害者の人生にもたらした影響である。こうした介入は人生を変化させ、キリスト教への改宗を含む、新たなプレッシャーに彼女たちを晒すことになつた。救済者のシナリオに反した選択をしたと非難された少女たちもいた。要するに、ニュースの舞台裏では事態は複雑な様相をみせているのだ。それは「ムスリム女性は自分たちの文化によって抑圧されてい

る」というストーリーには到底收まりきらない。

ムスリム女性の問題は、定期的に国際的な論争の的となってきた。他の地域の女性たちはそのようには扱われない。ディーナ・マフナーズ・シッディーキー（＊文化人類学者）の、国際的な女性の権利団体が取り上げてきたバングラデシュの有名なレイプ事件を対象とした細部まで目配りが行き届いた研究は、事件が国際的に知れわたるにつれて、いかに歪められてしまったかを明らかにしている。シッディーキによれば、裁判官が被害女性にレイプ犯と結婚するよう言い渡し、物議を醸した事件は全て、女性の証言と弁護士の説明によれば、実際には、元は合意に基づく恋愛関係が後に上手くいかなくなつたケースであつた。妊娠によって関係が露見したり、結婚の約束を反故にされたときに、現地の女性たちはレイプや誘惑の被害としての告発に踏み切つた。女性をレイプの無実の被害者として描き出すことは、その女性の体面や尊厳を守り、男性に交際相手と結婚せよというプレッシャーをかけるために役立つ。国際的な人権団体や女性の権利団体は、この解決法を少女たちの人権を著しく侵害するものと捉えるが、問題は、その社会における女性の尊厳にかかる社会的理念であり、セクシユアリティに関するステイグマであり、女性の選択肢を制限する法制度の偏狭さなのである。こうしたジェンダー化された制約と、おぞましい「女性への犯罪」とを混同してはならない。なおこの問題はイスラーム法とは何の関係もない。事件は、世俗の国家裁判制度のもとで裁かれる。<sup>(2)</sup>

最近ではシャリーアが——この言葉は今ではごく大雑把に、イスラームの法的伝統によつて導き出された法全般を指すものとして使われている——国際的なムスリム・アイデンティティのシンボルとされてきた。西欧の多くの人々は、シャリーアを女性の権利に対する恐ろしく手ごわい、伝統的な敵とみなしている。「シャリーア法」を適用することの影響と意味については激しい議論が戦わされてきた。<sup>(2)</sup> 東南アジア

ではアチエで、インドネシア政府との長きにわたる紛争の後、自治と津波の後の経済復興の「どちくさの」な  
かで、シャリーア法なるものが適用された。<sup>(25)</sup> シャリーア法が現地のジェンダー規範に違反することや、シ  
ヤリーア法と政治紛争とのつながりは、実のことろシャリーア法が伝統とは程遠い何かであることを露わ  
にした。アチエの近隣のマレーシアでは、イスラームの姉妹たち（Sisters in Islam）を名乗る画期的なムスリ  
ム・フェミニストのグループが、保守的なイスラーム法解釈に異議を唱えている。二〇〇九年にはこの団  
体から、イスラーム家族法の法改正を求める国際的な運動が生まれた。

地域の異なるムスリム世界の多様な事例は、ムスリム女性が身を置く様々な状況、彼女たちが加わるあ  
らゆるタイプの議論と戦略、そしていかに頻繁に彼女たちの経験が誤解され、状況の複雑さが省みられな  
かつたかを描き出す。「ムスリム女性は抑圧されている」という単純な物語の何が問題なのかを批判した  
これらの分析は、私たちへの戒めとなる。女性の権利の侵害や虐待は明らかにされなければならない。こ  
れは場所を問わない。シアトル、テルアビブ、ドバイでの性的人身売買であれ、ベルギー、カンボジア、  
ボスニアでのレイプであれ、シカゴ、ケープタウン、カーブルでの家庭内暴力であれ。また同時に、女性  
たちが日々晒されている、不安感から飢餓や病気に至るあらゆる苦しみにも目を向けるべきだ。その苦し  
みは常にジェンダー化されているわけでも、特定の文化や宗教コミュニティならではのものでもない。個  
々の女性が向き合う問題の原因となっているのは、誰、ないし何なのか、という難問を回避してはならな  
い。これらの問題に対する最も効果的な対応とは何か。またどういう人間が、これらの問題を理解し、対  
処するのに最も向いているのか。ムスリムの女性活動家は、自らのコミュニティにおけるジェンダー問題  
に長年取り組んできた。エジプト、シリア、また今日バンブルデシュとなつた地域では、その歴史は一世  
紀以上にもなる。エローラ・シェハーブ・ディーン（（＊バングラデシュを専門とする政治学者））が記したように、そうした改革運動

はもともと男性の主導で始められたが、「一九世紀末から二〇世紀初頭には（中略）ムスリム女性たち自身が、熱心に変革に向けて嘆願を行うようになった」<sup>28</sup>。

ここ一〇年の間、私は「抑圧されたムスリム女性」という言説の流布の政治と倫理について考えようとしていた。私は私の専門である人類学という学問分野よりも、世界で今まさに起きている出来事に触発されたのだった。そして「ムスリム女性の権利」が社会のなかで頻繁に使われる、その様を注視してきた。二〇〇一年の対アフガニスタン戦争の時の、抑圧されたムスリム女性という悲しいイメージがこの問題に目を向けるきっかけではあったが、この問題に対する最適なアプローチは、私が知る個々の事例をとことん検討することだと思う。それが、エジプトの小さなコミュニティに住み込んだ経験に基づいて、議論を進める理由である。私は、私が分析する女性たちがムスリム女性の代表であるとも、他の全ての女性を代表できるとも言っていない。そうではなくて、私が彼女たちの事例を使うのは、場所はどこであれ個々人を親密なレベルで知ることは、文化、宗教地域による単純な一般化に満足せず、問題にはわかりやすい要因や解決策などないということを示すためである。私は、論客の大胆な筆致よりも、小説家の繊細な記述や共感に強く惹かれる。

### 選択が生み出す混乱

多くの人はメディアが注目し、「ムスリム女性」の悲惨な状況についての真実として広めたセンセーションナルな抑圧の話を受け流すかもしれない。しかし、それでも大多数の人々は、女性の権利は選択と自由という価値観にもとづいて定義されるべきで、ムスリムのコミュニティではそれがどうしようもないほど

に損なわれている、という頑固な思い込みを抱き続いている。この束縛に対する思い込みを、外部の人間のみならず、ムスリム世界の進歩主義者も抱いている。それは、ヴェール（ヒジャーブ／ニカーブ／ブルカ／ヘッドスカーフ）への偏執的な懸念のなかに完璧に集約されている。ヴェールを纏う女性は強制され、あるいは男性からの圧力に屈していると思われている。実際は（公共の空間で）覆いを纏わなければならない状況は数えるほどしかない。そして教育を受けたムスリム女性は過去三〇年にわたって、これと正反対の問題と格闘してきた。彼女たちは反ヴェール運動に悩まされつも、彼女たちが大事に思つてゐる敬虔なイスラーム的な服装をするために、家族や、時には法にすら挑まなければならなかつたのである。ライラ・アハメドは、女性がヴェールを纏う決断をすることを「静かな革命」と呼ぶが、それは、その意味をめぐる長い歴史的な論争のなかで形作られてきた。<sup>(28)</sup> 服装は自由や拘束の象徴となりうるのだろうか。ある衣服を着るのが、自由選択の結果なのか、慣習なのか、社会的プレッシャーからなのか、ファッシュヨンなのかを区別することなど果たしてできるのだろうか。二〇〇七年、ニューヨークの主要な文芸雑誌、『ニューヨーカー』の表紙に登場したイラストは、このジレンマを見事に表していた。三人の女性がニューヨークの地下鉄車両に並んで座る。一人は全身黒い衣装を纏い、ニカーブを被り、目だけが見える。その隣には大きなサングラスをかけ、ビキニトップと短パンを着、ビーチサンダルを履き、ペディキュアをしたブロンドの女性がいる。その隣には、メガネをかけた修道女が修道服を着て座る。見出しへ「女子は女子」である。（\*<https://www.newyorker.com/conversation/2007/07/30>）

ムスリム女性の生について西欧で表象され議論される際に使われる用語のために、ムスリム世界における女性を対象とする本は必ず、選択をどう考えるか、またなぜ、自由に究極的価値があると主張するのか、という問いに直面する。問題の根幹をなすこうした課題に、私は本書のなかで何度も立ち戻るだろう。私

たちはみな家族のなかに生まれ、それぞれが特定の社会的 세계에 위치づけられて生きている。私たちは特定の国の特定の社会階級、コミュニティに属し、かけがえのない歴史的瞬間を生きている。私たちの欲望はそうした状況に基づき生み出される。そしてその同じ状況のために、選択肢は限られている。いずこも同じというつもりはなく、なかには、相対的に選択肢が少なく、選択を可能とする権力にアクセスできない個人やコミュニティもあるが、つまるところ、ヴァージニア・ウルフが『自分一人の部屋 (A room of one's own)』で教えてくれたように、少なくともイギリスでは、第二次世界大戦まで、より多くの選択肢を持ち、選択を可能とする権力を持っていたのは通常、男性だった<sup>(29)</sup>。しかし、選択を可能とする相対的権力の有無を決定づけるのは、単に性別や文化なのだろうか。私たちは、自分の人生を主体的に生きる上で誰もが経験する限界について考える必要がある。さらに、選択肢があることが人生の価値を計る唯一の指標ではない「と考える」人々のことをどう捉えるか、と自問すべきである。ほとんどの宗教的伝統は、人は自分に起きた出来事を完全にはコントロールできない、という前提のもとに成り立っている。古代ギリシャ人も、ヒュブリス——神々を侮る傲岸不遜なプライドや自信——を、致命的弱点とみなしていた。

このような問いは、ムスリム女性とその権利について考える上で非常に重要である。リベラルな民主主義はムスリム女性が何を着るべきかを法で規制したがる、という奇怪な見解について検討するとき、ウエンデイ・ブラウン（＊フェミニスト思想家）<sup>(30)</sup>は、世俗主義は、西欧の女性に自由も平等ももたらしていないといふことを気づかせてくれる。ブラウンは、私たちのものの見方は「むき出しの肌やセクシュアリティの誇示は、女性の自由と平等を計る指標である」という暗黙の前提に基づいていていると言う。その前提に、どうしたらより良いムスリムになれるかをモスクで学ぶ女性たちや、新たなタイプのヴェールの着用を宗教的義務として肯定的に捉える女性たちは当惑する<sup>(31)</sup>。黒い外套を纏い、頭部を布で覆っている私の友人、ザ

イナズは、おそらくこの前提にショックを受けるだろう。ムスリム女性には相対的に選択の余地が少ないので、という私たちの思い込みについてブラウンは、「全ての選択は重層的に重なり合う様々な権力によって状況づけられ、選択とは所詮貧弱な自由にすぎない」ことを無視していると結論づけている。

自由に関するこんなにも単純な考え方がどうやって命脈を保ってきたのか、という問いは、本書を貫くテーマである。「本書で」私は、政治的なレトリックと大衆文化の二つを見ていく。ソマリア出身の移民、アイヤーン・ヒルシ・アリは、北アメリカとヨーロッパにおける女性とイスラームについてのイメージ形成に、過去一〇年のあいだ絶大な影響を及ぼした。彼女はムスリム女性を「籠にとられた乙女」と呼ぶ。彼女は自らを、籠から自力で逃げ出し、イスラームに基づくと彼女が説明する「部族的な性道徳」を拒否し、無神論者として自己を解放したムスリム女性として描く。<sup>(32)</sup> 彼女は、若いムスリムの少女に、実践的な家出指南をする。<sup>(33)</sup> 虐待されるムスリム女性を扱う大衆向けの文庫本は、彼女たちを囚われの鳥、捕まえられたハエ、ビンに入れられたクモ、などの比喩で表することで、アリのような見解を補強する。

## 傷ついた小鳥

自由と不自由の対比は、現代のアメリカ・フェミニズムの中核を占め、それは強力な国家のイデオロギーや政治哲学に依拠している。非常に詩的でよく知られたイメージは、マヤ・アンジェロウ（＊アメリカの黒人女性詩人）の今や古典となつた自伝、『私は知っている、なぜ籠の鳥が歌うかを（I know why the caged bird sings）』（＊日本語版タイ）のタイトルによく表れている。籠の鳥と自由な鳥という対比が、人種差別と性虐待からの解放を扱つた彼女の自伝的物語を象徴している。籠の鳥の影は、アンジェロウの詩では、「悪夢を見て叫び

ルは『歌ふ、飛べ』ない鳥たちよ

声をあげる」<sup>(3)</sup>

この典型的な対比について、ヨルダンで聞いた、悪夢の叫びについての別の歌を通して考えてみたい。

この歌は、私達が今日生きている新しい文脈、すなわちアイヤーン・ヒルシ・アリのような、西洋の自由とイスラームによる束縛を対比させる大衆言説が支配的な文脈に對して語りかけ、女性と自由について、これまでと異なった考え方をするように私たちを促してくれる。私達が持つイメージと自由の意味についての思索を、一方では個々人の毎日の暮らしのなかに位置づける必要があり、他方では介入という「帝国」の政治のなかに位置づけなければならないと、この歌は真摯に訴えているのである。自由か抑圧か、選択か強制かという二者択一状況など、ほとんど存在しないことがわかるだろう。文化による束縛こそが原因であるかのように他者の不自由な状況を表象すると、外部の人々は救済という使命へと駆り立てられる。こうした表象は、正義をめぐって内部で交わされた議論や制度的闘争などの、どの国家も持つ歴史を覆い隠してしまう。またそれは、人々のこうした生き方に責任を有する社会的・政治的権力から人々の関心を逸らせもある。

私はその歌を聞かせてくれたのは、大好きなオバだつた（厳密には彼女は私の父のイトコだつたが、私たちは彼女を「オバさん」と呼んでいた）。一〇年前に寡婦になつた彼女は、兄弟姉妹の近くに住むためにヨルダンに越してきた。一九四八年のパレスチナ人の追放以来、家族は散り散りになつていた。しかし彼女の兄弟たちは、多くのパレスチナ人同様、第一次湾岸戦争時にクウェイトから追い出され、後に再集した。私は彼女と長いこと会つていなかつたが、ヨルダンでの会議に参加したときには久しぶりに連絡を取りつた。七〇歳代後半なのに、彼女はまだ美しく魅力的だつた。センスのいい化粧をし、髪は色鮮やかなクリップでまとめていた。親戚を訪ねる時には、エレガントな黒のロングスカートと流行のアンクルブーツ

を履き、緩やかで優美なひだを作ったシフォンスカーフで頭を覆っていた。

覚えていた限りいつも、彼女は礼拝の時間に正確だった。彼女は常に、ムスリム世界で時を過ごした者なら誰でも知っているような、神への嘆願や信仰を示す決まり文句を唱えていた。しかしオバは歌を歌うのも大好きだった。ある日、彼女は私たちのために歌を歌おうとした。「私が作った沢山の歌のなかで、もの悲しいこの歌が一番、私の気持ちをうまく表現してる」と彼女は言つた。興味深いことに、この歌はマヤ・アンジェロウが自由について書いた詩と同じイメージを呼び起こした。

### 私は傷ついた小鳥

私は世界を生きる、よそ者として  
自分の国を探して、探して  
見つけたのは自分の嘆きだけ

### 私の傷は深く

癒すには長い時がかかる  
私は内に叫ぶ  
でもその声を聞くのは私だけ

彼女は私にこの歌を訳してくれた。私がアラビア語がわかるか、深い意味を理解できたのか、不確かだったからだ。「皆、私のことを幸せだと思つていて。表向きは優しくて、面白いことが好きだから」と彼

SAMPLE  
Shoshi-Shinsyu.com

女は言つた。陽気で面白い。確かに彼女は生き活きとした話し手で、人々の弱みすら魅力として捉えることができた。彼女が自分の膝や視力の衰えに不満を漏らすとき、彼女は目を輝かせ、「わかるでしょ、三歳と半分になることがどんなに大変か！」と言つた。彼女は、この歌は、彼女の娘（私と同じくらいの年で、私とも仲が良かった）がウイスコンシンで大学の友人と交通事故に遭い、亡くなつた後に作つたものだと打ち明けてくれた。彼女は数か月、家に閉じこもつた。しかし今は別の気持ちでこの歌を歌つているという。夫を亡くしたすぐ後に、彼女は長男をガンで亡くしていた。

オバは、彼女に相応しい人生を生きてはいなかつた。才能と知性があり、ヤーファー（海に面した港町。一九〇五年にテルアビブと合併。）の良家の出のオバは、当時は良いと思われた結婚をした。彼女の相手はかなり年上だつたが、

イエズス会〔設立の学校機関〕できちんとした教育を受けていた。彼は、リッダ空港（現在のベンゲリオン空港）のイギリス税関で立派な仕事についていた。彼女は結婚式の日に写真館で撮影した白黒写真を引き伸ばして寝室に飾つていた。写真のなかの彼女は淑やかに椅子に座り、髪をカールし、白い真珠のネックレスを首にかけ、若い、女性らしい体を丈の長い、白いレースのドレスに包んでいた。しかし彼女たちの人生に、思いがけない形で転機は訪れた。

結婚から数年後、ヤーファーでもパレスチナにユダヤ国家の建設をもくろむテルアビブのユダヤ人との間で諍いが起つた。混乱の時期に、彼女の夫は妻と幼い二人の息子を連れてエジプトに「休暇」に向かつた。スーツケースを二つ持つていた。彼女はヤーファーがシオニストの手に落ちたというニュースを聞いたときに何が起きたかをよく話した。シオニストの入植者が力づくでヤーファーを奪つたと聞いたとき、彼女と家族はカイロのホテルにいた。国連の分割案では、ヤーファーはパレスチナ人の手に残るはずだった。しかしイスラエル国家の建国が宣言され、ヤーファーはイスラエル領になつた。彼女の夫は、自

分の頭を壁に打ち付けた。二度とは戻れず、彼らはそれから二〇年、カイロの下層中産階級の居住区でつましく暮らした。

私が彼女たちと親しくなったのは、五〇年代後半に父がエジプトでユネスコに奉職した時だった。私たち兄弟は、彼女の子どもであるイトコたちと遊ぶのが大好きだった。オバはおいしい食事を作り、家事をしながら歌を歌い、私たちに近所で悪ふざけをさせてくれた。彼女は一人で家庭を切り盛りしていた。難民だった彼女の夫は職探しに苦労していて、遠隔地に行かされることもあった。そもそも彼は気難しい男だった。少なくとも私が彼を知った頃にはそうで、何か国語（アラビア語、フランス語、英語、ヘブライ語）も話せることを誇りにし、本に埋もれていることも多かった。彼はオバの人生や音楽への熱意を分かち合ってはいなかつた。彼らは四人の子どもを育て、順番にアメリカの大学に通わせた。長男は技術者になり、すぐに両親を呼び寄せて、アメリカ中西部の郊外に彼らの住居を用意した。

彼女の人生は、不公正なことだらけだった。一九三〇年代、四〇年代にヤーファーで育つた少女は、教育を受ける前に早すぎる結婚をした。何十万という他のパレスチナ人同様、難民となつた彼女は全てを失い、一九四八年以降は家族にも会えなかつた。相性の良くない男性と五〇年以上連れ添い、人生を諷歌したとは言い難いが、彼女なりに最善を生きた。歌は彼女が前に進むためのよすがとなつた。彼女自身を歌つた傷ついた小鳥の歌はしかし、彼女の個人的な窮状以上のものを表している。「私はパレスチナと同じなの。私の傷は深い。私たちパレスチナ人は、みな傷ついていて、みな世界のよそ者なの」と彼女は私に説明してくれた。特定の歴史的、政治的状況は彼女の個人的な状況と分からちがたく結びつき、彼女の人生を形作り、それを限定した。

オバは歌で癒され、家族に喜びを見出した。しかし会話から、彼女が礼拝によつて心の平穏を得てゐる

ことがわかつた。オバは、十分な教育を受けることができなかつたにもかかわらず、毎日クルアーンの一部を苦心しつつ読んでいた。彼女は目を輝かせ、クルアーンは素晴らしいと私に言つた。そして「人生に對して哲學的になつてきたわ。人生が運んでくるものは受け入れなきやね」と語つた。

オバはザイナブよりも経済的には恵まれていた。彼女はザイナブのように烟で働く必要も、治安警察と衝突する必要もなかつた。今では彼女は、ドライフラワーと、彼女が愛しそして喪つた故人たちの写真で飾つた自分の部屋で、中産階級の快適な暮らしを送る。彼女が、黒衣を纏い泥レンガの家に暮らす農村女性を自分と重ねていたとは思えないし、同じように、アメリカで流通するムスリム女性のイメージ——慈悲な神に奴隸のように服従し、とあるクルアーンの節のために、みじめな幽閉状態と男性からのひどい仕打ちに甘んじるムスリム女性——に自分を重ねていたとも思えない。家族への愛と、神への信仰が、彼女の生を支えていた。

こうした女性たちの人生は、ある女性が経験する困難の原因がいかに多様で複雑かを教えてくれる。二〇一一年のエジプトにおける治安警察の権力の乱用から、植民地統治者であるイギリスの支援をうけたシオニストによる、一九四八年のパレスチナ人の土地やわが家からの追放という不正義に至るまで、女性たちの人生における最も基本的な条件は、政治権力によつて形作られている。その影響は非常にローカルな形で現れるが、もともとは国家規模、もしくは国際的な規模の出来事に由来する。どちらの女性にも、彼女たちが活躍することを後押ししてくれる夫はいなかつた。それは個人的な性格の問題に由来することもあれば、不安定な経済的、政治的状況に由来することもあつた。こうした女性たちの自信や公的な体面は、男性たちに搖るがざることがあつた。しかし彼らも、自分たちの恥や不安を隠しながら、家族のために必死だつた。彼らが完璧な夫になれなかつたのは、彼らがムスリム男性だったからなのだろうか。

そして私たちは、こうした女性たちの回復力や主導力をどう評価すればいいのだろうか。どちらの女性も子どもたちにより良い生活を提供するために身を粉にして働き、子どもたちのために生き、人生を子どもたちに託した。大切な人たちの喪失はオバを苦しめた。彼女はその悲しみを、神への信仰によって凌ごうとした。ザイナブは息子たちの苦難と失敗、長女の孤独、末娘の糖尿病で疲弊した。神を信じることで、ザイナブは強さと今後の見通しを持つことができていた。

ザイナブやオバのような女性たちの人生は、抑圧、選択、自由という用語が、彼女たちの人生の力強さや鮮やかさを描き出すためには使えない、なまくらな道具であることを示している。これらの用語は、こうした女性たちの大変な努力や、喪失や寂しさを表す歌、さらには権利に対する激しい怒りを理解するためにはほとんど役に立たない。二人の女性は一人とも大変な人生を生き、実際にジェンダー化された物事によって苦しめられもした。しかしそれでも彼女たちは、自分が文化によって拘束されているとか、宗教によって抑圧されているとみなされることをおかしいと感じるだろう。籠の鳥や道端のごみ袋などのイメージは、彼女たちが生きる社会的現実や、困難な状況のなかで彼女たちが編み出す創造力に富んだ対処法を不可視なものにしてしまう。

## 日常という政治

本書で探求する問いに私は、二〇〇一年九月一日以降、ムスリム女性の権利に大衆が大いに関心を寄せた、その盛り上がりのなかで向き合つた。私は、ムスリム女性の窮状の表象のされ方や、彼女たちは無権利状態であるなどの議論が実際に政治的に機能する、そのあり方に懸念を抱いている。本書では、「ム

「スリム女性の権利」という概念が論争の場や文書資料、女性団体の創設や、女性運動などで使い回されることと、それが難民キャンプや国連の会議場で女性の生き方を左右する、その様子を辿る。はるか遠くの女性たちの人生を、権利や、権利の存在ないし欠落という用語で説明する枠組みが、私たちの目から日々の暴力と愛の形の両方を覆い隠してしまう、そのしくみを明らかにする。権利「という概念」によって人生を評価するそのやり方が、様々な女性たちに何をもたらして（そして奪つて）いったのかを問いたい。平行して、ムスリム女性に文化的他者性を与えるための鍵となるシンボル——ヴェールから名誉犯罪まで——が、二一世紀の政治プロジェクトのなかでどのように取り入れられているかと、なぜそれらのシンボルが私たちを魅了するのか、その理由を明らかにする。

人々の人生を理解しようとすることは私の生きがいである。そしてそれは、人類学者としての使命でもある。だからこそ私は、前述のような大きな問いを、私の知るある個人の生き方を通して追究するのである。ここで取り上げるのは、良い暮らしを求めて奮闘し、現在や将来の不確かさという制約のなかで、時には難しい選択をする女性たちである。私は、家族と、コミュニティと、国と、そして世界と共に暮らす個人として、長年彼女たちとつきあってきた。彼女たちは直面する問題をどのように捉えているのか。彼女たちは自分たちが欲するものについて何と言っているのか。彼女たちを私達の生活と隔絶した場所で全く違った人生を生きている人々とみなすこと。それが、国家とも地域とも個人的状況とも切り離された神話的な場所にムスリム女性を位置づけてしまつてのこと。これらを検討することは、ムスリム女性について何を教えてくれるのか。彼女たちが置かれた状況を考えることは、私たちに人生——それがいかなるものであれ——における選択や自由の価値について、何を教えてくれるのか。

こうした女性たちは、ここ一〇年の間に現れ大きなうねりとなつた、グローバルな女性の権利を擁護す

る動きや、「ムスリム女性」の権利（や誤った仕打ち）に特別な関心が寄せられる、その理由を批判的に検討するための一助となると信じる。ムスリム女性を救う、という現代の道義的十字軍（moral crusade）の戦いは、どのように正当化されているのか。善意から発する問題関心は、世界のあちこちで女性が苦しめられていることに対し、どのような世界規模の影響をもたらしているのだろうか。女性たちは自らの文化に閉じ込められているという主張はなぜ、「世界コミュニティ」による救助というファンタジーの精神的支柱たりえているのか。<sup>65</sup>こうした問いは私にとっては非常に重要である。経験上、ザイナブやオバのような女性がこうした懸念のありかたに驚くことを知っているからである。

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 1 ムスリム女性に（いまだに）救援は必要か

鼻を切り落とされたアフガニスタン出身の若く美しい女性が『タイム』誌の表紙を飾ったのは、政治的な時宜にかなつた出来事だったと識者は述べたものだ（＊参考文献の<sup>5</sup>Seeger, Richard）。ターリバーンのメンバーである夫とその家族の懲罰によつてこのような姿になつたビビ・アーカイシャの写真が路傍の売店に並び、人々の心をかき乱したのは二〇一〇年八月のことである。八か月前、オバマ大統領はアフガニスタン駐留軍の増員を許可した。しかし最近では、調停のための会合にターリバーンのメンバーも迎えようという話が出てゐる。『タイム』誌の表紙には、ビビ・アーカイシャの写真と並んで「我々がアフガニスタンを見捨てたら、何が起きるのか？」という見出しがついていた。つまり、女性たちが最初の犠牲者になるだろう、と言いたいのである。そこに書かれていないのは、彼女の鼻が切り取られたとき、アフガニスタンにはまだ米英軍が駐留していたという事実である。

『タイム』誌は、大量の図像の中からビビ・アーカイシャの写真を選んだ。撮影したのは南アフリカ人の才能ある写真家、ジョディ・ビーバーである。彼女は、二〇一〇年の世界報道写真大賞の授賞式で、この写真を撮影した経緯について語つた。アフガニスタンで女性たちの肖像写真を撮る仕事を請負つた彼女は、